東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響(5)：里帰り分娩との関連

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-05-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 恭子, 田村, 毅, 倉持, 清美, 中澤, 智恵, 岸田, 泰子, 及川, 裕子, 荒牧, 美佐子, 森田, 千恵, 泉, 祐之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/2981

東京学芸大学紀要６部門　**55**　pp. 123～131，2003

出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響(5)

―里帰り分娩との関連―

木村　恭子*・田村　　毅**・倉持　清美**
中澤　智惠**・岸田　泰子***・及川　裕子****
荒牧　美佐子*****・森田　千恵******・泉　　裕之*******

生活科学

（2003年７月31日受理）

KIMURA, K., TAMURA, T., KURAMOCHI, K., NAKAZAWA, C., KISHIDA, Y., OIKAWA, Y., ARAMAKI, M., MORITA, C., IZUMI, H. : Comparison of marital relationship of the couple who had their first child birth in relation to their perinatal visits to the family of origin. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Sect. 6, 55：123－131（2003）　ISSN 1341－1705

Summary

The purpose of the paper is to suggest methods of child care in the future in relation to the influence of family relationship of the Japanese couples, such as their perception of children and the fathers' involvement before and after the mothers' perinatal visit to the family of origin.

Following results were obtained. 1) Compared to husbands who agreed for their wives for the perinatal visit, those whose wives stayed home were more helpful with the wives' delivery, better understood their wives' life changes, had greater cooperation with child care, and better recognized their role as fathers. 2) Wives who decided not to visit the family of origin took more care of their husbands.

From these results it was recognized that ; 1) mothers' perinatal visit to the family of origin contained problems regarding the understanding and taking care of partners that was essential for establishment of the marital relationship, and 2) fathers' whose wives visited the family of origin had greater chance of difficulties cooperating with both child care and recognizing their role as fathers. Perinatal visit to the family of origin would interfere with the development of father-child bond, since number of child care activities were undertaken by their wives, and husbands were disengaged. (in Japanese)

Key words : Perinatal visit, family of origin, perceptions of child, marital relationship, father, child care

Department of Home Economics, Tokyo Gakugei University, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan.

＊　日本赤十字武蔵野短期大学
＊＊　東京学芸大学生活科学学科（184-8501　小金井市貫井北町4-1-1）
＊＊＊　島根医科大学
＊＊＊＊　埼玉県立大学短期大学部
＊＊＊＊＊　お茶の水女子大学研究生
＊＊＊＊＊＊　東京ウィメンズプラザ
＊＊＊＊＊＊＊　板橋区医師会病院

はじめに

私たちは結婚した夫婦が初めて子どもを持ち，親になる過程で，親としての成長，夫婦関係の変化，子どもの発達への影響を明らかにするために研究を行っている。

今回は出産後４ヶ月時に行った質問紙調査の結果から，里帰り分娩が子どものイメージ，親のストレスや不安，夫婦関係の変化，父親の育児参加に与える影響を調査した。

本論文では「里帰り分娩」という用語の定義を，瓢風[1]が報告している「妻の実家で出産すること」というより「実家の近くにある施設で分娩すること」という定義を使用する。

日本における里帰り分娩に関する先行研究をみると，野村ら[2]の調査から，里帰り分娩のメリットとして，夫以外のものの助力や人手が得やすいこと，妊娠・分娩に関する妊婦の不安や恐怖の解消があげられている。デメリットとして，実家依存傾向があり，夫婦愛の確立がされにくいと報告している。また，父親としての自覚は，新生児とのふれあいを契機にしていることが伺われるとされており，出産後の家庭の確立という面から見ると，妻，夫の立場から母親，父親としての役割の獲得と子どもの位置の確立が重要であり，里帰り分娩では，これらの確立に問題があると指摘している。

加藤[3]らも里帰り分娩の問題点として，初期の父子関係の確立が難しいことを指摘している。

海外における里帰り分娩についての先行研究は皆無に等しく，「里帰り分娩」という言葉にあたる英単語も見あたらない。海外から日本に看護指導者としての研修に来ている看護管理者達に「里帰り分娩」について質問したところ，タイ，カンボジア，フィジー，パキスタン，ラオス，サウジアラビア，トンガにおいては「里帰り分娩は見られる」と回答し，ウルグアイでは「出産も子育ても父親（夫）と母親（妻）が２人で行うこと」と考えており，夫のいない場所での分娩は想像できないようであった。

このインタビューで里帰り分娩の頻度までは明らかにならなかったが，日本では昭和63年の報告で13.3%と報告されている[4]。

里帰り分娩を医学的な面から調査した研究では，1980年以前は妊娠・分娩・新生児の異常が多いと報告されていたが，その後の改善によって，現在では里帰り分娩の異常は少なくなったと分析している[4]。

このような先行研究の結果をまとめると，里帰り分娩は医学的に見て，極端にリスクが高いということはなく，妻の身体的，精神的サポート，育児支援を得るために，十分な効果があるが，その後の父子関係，夫婦関係に問題を与えるということは明らかである。

家庭内での人間関係，親子・夫婦関係が子どもの成長発達に大きな影響を与えることは周知の事実であり，現に家庭での問題が子どもの問題行動をひきおこす原因のひとつであることも少なくない。

これらを予防するためにも，里帰り分娩がどのように子どもイメージの形成，育児参加，親役割の獲得，親子・夫婦関係に影響するのか調査し，先行研究と比較，考察することは意義のあることと考えた。

この研究のプロジェクトであるが，前述したような目的にむけて，第１子を妊娠中のカップルを対象に縦断的に量的，質的な研究を行っている。研究方法は質問紙調査が中心であるが，質問紙では把握できない夫婦のずれなどをインタビューにて調査を行っている。

また，子育ての現状の把握と子育て支援として，子育て教室などの開催や電子メイルでの相談を行っている。

現在までに先行研究の分析[5]，妊娠期に行った第１次質問紙とインタビューの分析[6]，出産前後のインタビューの分析[7]，質問紙自由記載内容の分析[8]，子育て教室の実践報告[9]をまとめ報告している。

方　　法

１．研究対象

東京，埼玉，茨城，島根，愛媛において，保健センターや病院などで実施されている母親学級や両親学級に参加している妊婦とその夫に第１次質問紙を配布（6,289組），郵送や直接手渡しなどによって個別に回収した。この中から今後の研究に協力の意志を示した1,390組に分娩後４ヶ月時に第２次質問紙を郵送にて配布，733組から回収した。その後，第２子を妊娠中のサンプルを除外し，調査対象となったのは657組である。

表１　調査紙回収状況

	配布数	回収数
第１次調査紙	6,289	2,117
第２次調査紙	1,390	733

２．質問紙の内容

子どもの年齢，子どもの体重，子どもの現在の様子，出産前後の様子，里帰り分娩の有無，現在の心

境，夫の子育てや家事の参加度およびお互いのパートナーへの満足度，妊娠時と出産後の生活の変化，育児分担などである。

３．研究方法

第２次質問紙調査の回答を分析の対象とした。統計処理はSPSS10Jを用いて，里帰り分娩の有無が子どものイメージ，現在の心境，父親の子育てや家事の参加度およびお互いのパートナーへの満足度，妊娠時と出産後の生活の変化などとの間に差があるのか明らかにするために，マンホイットニーのU検定を用いて検討した。

結　　果

１．対象者の年齢（表２）

父親の出産時の年齢は最小値18歳，最高値61歳であり平均31.0，標準偏差4.9であった。

母親の出産時の年齢は最小値18歳，最高値43歳であり平均29.0，標準偏差3.9であった。

子どもの月例は１ヶ月から９ヶ月であり平均4.2ヶ月（標準偏差.98），出生体重は550ｇ～4,235ｇで平均2,993ｇ（標準偏差382.4）であった。分娩週数は20週から43週で，平均38.9週（標準偏差3.4）であった。

表２　対象者の年齢

	平均年齢	SD	最高年齢	最少年齢
母親（妻）	29.1	3.96	43	18
父親（夫）	31.0	4.90	61	18

２．里帰り分娩の割合

里帰り分娩をしたカップルが276組（41.9%），里帰り分娩をしなかったカップル（非里帰り分娩）が381組（57.8%）であった。

３．里帰り分娩と子どもイメージとの分析（表３）

「子どもをいじらしいと思う」「子どもを抱きしめたいと思う」「子どもに触れたいと思う」「子どもを邪魔だと思う」「子どもをわずらわしく感じる」という項目において，「その通り」から「違う」「わからない」という５段階で回答してもらった。これらすべての項目で里帰り分娩の有無に関わらず，有意差は認められなかった。

「子どもを抱きしめたいと思う」「子どもに触れたいと思う」という項目では父親，母親とも９割以上が「その通り」「どちらかというとその通り」と回答していた。また，「子どもをいじらしいと思う」では７割以上が「その通り」「どちらかというとその通り」と回答していた。逆に子どもに対する否定的なイメージを問う「子どもを邪魔だと思う」「子どもをわずらわしく感じる」という項目においては７～８割以上が「違う」と回答していた。

表３　里帰り分娩と子どもイメージとの関連

				その通り	どちらかというとその通り	どちらかというと違う	違　う	わからない
子どもをいじらしいと思う	里帰り分娩	母	n＝251	158(62.9)	46(18.3)	16(6.4)	18(7.2)	13(5.2)
		父	n＝256	156(60.9)	46(17.9)	24(9.3)	21(8.2)	9(3.5)
	非里帰り分娩	母	n＝344	231(67.1)	64(18.6)	12(3.4)	19(5.5)	18(5.2)
		父	n＝343	209(60.9)	73(21.2)	15(4.3)	29(8.4)	17(4.9)
子どもを抱きしめたいと思う	里帰り分娩	母	n＝258	234(90.6)	23(8.9)			1(0.38)
		父	n＝258	211(81.7)	38(14.7)	8(3.1)	1(0.3)	0
	非里帰り分娩	母	n＝348	305(87.6)	39(11.2)	3(0.8)	1(0.2)	0
		父	n＝345	280(81.1)	59(17.1)	5(1.4)	1(0.2)	0
子どもに触れたいと思う	里帰り分娩	母	n＝259	235(90.7)	22(8.4)	0	0	2(0.7)
		父	n＝258	230(89.1)	27(10.4)	1(0.3)	0	0
	非里帰り分娩	母	n＝348	304(87.3)	43(12.3)	1(0.2)	0	0
		父	n＝345	301(87.2)	41(11.8)	3(0.8)	0	0
子どもを邪魔だと思う	里帰り分娩	母	n＝258	3(1.1)	3(1.1)	30(11.1)	214(82.9)	8(3.1)
		父	n＝256	2(0.7)	3(1.1)	26(10.1)	223(82.9)	2(0.7)
	非里帰り分娩	母	n＝346	2(0.5)	7(2.2)	39(11.2)	287(82.9)	11(3.1)
		父	n＝343	1(0.2)	8(2.3)	30(8.7)	300(87.4)	4(1.1)
子どもをわずらわしく感じる	里帰り分娩	母	n＝259	3(1.2)	5(1.9)	39(15.0)	204(78.7)	8(3.08)
		父	n＝257	1(0.4)	6(2.3)	30(11.6)	218(84.8)	2(0.7)
	非里帰り分娩	母	n＝348	1(0.2)	8(2.2)	57(16.3)	270(77.5)	12(3.4)
		父	n＝345	1(0.2)	8(2.3)	43(12.4)	286(82.8)	7(2.0)

人（%）

４．里帰り分娩と子育て中の心境や子育てに対する負担感，不安との分析（表４）

現在の生活の中で「パートナーにあたりたくなる」「誰かに愚痴を言いたくなる」「世の中に取り残される」「ひとりぼっちで寂しい」「子育ては大変だと思う」「子どもが生まれたことによって行動が制限される」「順調に育っているか不安である」という項目を「よくある」から「まったくない」の４段階で回答してもらった。これらすべての項目で里帰り分娩の有無に関わらず，有意差は認められなかった。

５．里帰り分娩と親の実感との分析（表４）

「親となった実感」という項目を「よくある」から「まったくない」の４段階で回答してもらった。里帰り分娩の有無で母親に有意な差はみられなかったが，父親では，非里帰り分娩を選んだ父親のほうが「親になった実感がよくある」と有意に高く回答していた（ｐ＝0.001）。

６．里帰り分娩とパートナーへの気遣いとの分析（表５）

「子どもが産まれてから夫（あるいは妻）はあなたを気遣ってくれますか」「（逆に）あなたは夫（あるいは妻）を気遣っていますか」という質問に「よく気遣う（よく気遣っている）」から「ほとんど気遣ってくれない（ほとんど気遣わない）」の４段階で回答してもらった。里帰り分娩の有無に関わらず，母親も父親も「（パートナーは）よく気遣ってくれる」「まあまあ気遣ってくれる」と８割以上が回答しており，有意に差は認められなかった。逆に「あなたは（パートナーを）気遣っていますか」では，父親は母親に対して８割以上が「よく気遣う」「まあまあ気遣う」と回答しており，有意差はみられなかった。母親では，非里帰り分娩の母親は66.5%，里帰り分娩をした母親は55.3%が「よく気遣う」「まあまあ気遣う」と回答しており，有意差が認められた（ｐ＝0.032）。

表４　子育て中の心境

				よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	
パートナーにあたりたくなる	里帰り分娩	母	n＝273	27(9.8)	141(51.6)	77(28.2)	28(10.2)	
		父	n＝273	3(1.0)	35(12.8)	104(38.0)	131(47.9)	
	非里帰り分娩	母	n＝379	44(11.6)	169(44.5)	114(30.0)	52(13.7)	
		父	n＝376	3(0.7)	34(9.0)	149(39.6)	190(50.5)	
誰かに愚痴を言いたくなる	里帰り分娩	母	n＝274	36(13.1)	128(46.7)	76(27.3)	34(12.4)	
		父	n＝273	3(1.0)	35(12.8)	112(41.0)	123(45.0)	
	非里帰り分娩	母	n＝380	39(10.2)	158(41.5)	132(34.7)	51(13.4)	
		父	n＝376	10(2.7)	38(10.1)	140(37.2)	188(50.0)	
世の中に取り残される	里帰り分娩	母	n＝274	16(5.8)	58(21.1)	104(37.9)	96(35.0)	
		父	n＝273	2(0.7)	13(4.7)	86(31.5)	172(63.0)	
	非里帰り分娩	母	n＝380	26(6.8)	87(22.8)	142(37.3)	125(32.8)	
		父	n＝375	2(0.5)	14(3.7)	103(27.4)	256(68.2)	
一人ぼっちで寂しい	里帰り分娩	母	n＝274	15(5.4)	59(21.5)	91(33.2)	109(39.7)	
		父	n＝258	3(1.1)	6(2.3)	56(21.7)	193(74.8)	
	非里帰り分娩	母	n＝380	16(4.2)	65(17.1)	135(35.5)	164(43.1)	
		父	n＝345	1(0.2)	6(1.7)	63(18.2)	275(79.7)	
子育ては大変	里帰り分娩	母	n＝274	168(61.3)	84(30.6)	20(7.2)	2(0.7)	
		父	n＝273	196(71.7)	63(23.0)	9(3.2)	5(1.8)	
	非里帰り分娩	母	n＝380	216(56.8)	125(32.8)	31(8.1)	8(2.1)	
		父	n＝373	259(69.4)	89(23.8)	21(5.6)	4(1.0)	
行動が制限される	里帰り分娩	母	n＝274	144(52.5)	111(40.5)	16(5.8)	3(1.0)	
		父	n＝273	111(40.6)	128(46.8)	30(10.9)	4(1.4)	
	非里帰り分娩	母	n＝380	182(47.8)	166(43.6)	28(7.3)	4(1.0)	
		父	n＝376	132(35.1)	185(49.2)	47(12.5)	12(3.1)	
順調に育っているか不安	里帰り分娩	母	n＝274	24(8.7)	95(34.6)	124(45.2)	31(11.3)	
		父	n＝273	32(11.7)	106(38.8)	88(32.2)	47(17.2)	
	非里帰り分娩	母	n＝380	41(10.7)	106(27.8)	174(45.7)	59(15.5)	
		父	n＝376	36(9.5)	131(34.8)	140(37.2)	69(18.3)	
親となった実感がある	里帰り分娩	母	n＝274	171(62.4)	80(29.1)	21(7.6)	2(0.7)	
		父	n＝273	141(51.6)	110(40.2)	20(7.3)	2(0.7)	
	非里帰り分娩	母	n＝380	231(60.7)	115(30.2)	31(8.1)	3(0.7)	**
		父	n＝377	230(61.3)	125(33.3)	18(4.8)	4(0.6)	

人(%)　**ｐ＜.001

7．夫の育児参加との分析（表６）

父親に対して「あなたは沐浴，授乳，おむつ交換，あやす，こもりについて，どのくらいしていますか」，母親に対して「子供が産まれたあと，夫は沐浴，授乳，おむつ交換，あやす，こもりについて，どのくらいしていますか」という質問に対して「たくさんする」から「まったくしない」の４段階で回答してもらった。非里帰り分娩を選んだ父親の方が「沐浴」について「たくさんする」「ときどきする」と回答しており，有意差が認められた（ｐ＝0.022）。

また，里帰り分娩の経験の有無に関わらず，父親は「授乳」４割，「おむつ交換」７割，「子どもをあやす」９割以上，「こもり」８割程度「たくさんする」「ときどきする」と回答していた。母親が父親の育児参加を評価した項目において，「沐浴」「子どもをあやす」「こもり」について８割以上，「おむつ交換」は７割程度，「授乳」については４割が「たくさんする」「ときどきする」と回答しており，有意な差は認められなかった。

8．パートナーに対する出産時の満足度について（表７）

妻が分娩時の夫の協力に対して「満足」から「不満」の４段階で回答してもらった。非里帰り分娩の母

表５　パートナー間での気遣い

				よく気遣う	まあまあ気遣う	あまり気遣ってくれない	ほとんど気遣ってくれない	
パートナーからの気遣い	里帰り分娩	母	n＝274	103(37.5)	135(49.2)	29(10.5)	7(2.5)	
		父	n＝257	77(29.6)	133(51.7)	39(15.1)	8(3.1)	
	非里帰り分娩	母	n＝380	142(37.3)	189(49.7)	32(8.4)	17(4.4)	
		父	n＝374	119(34.4)	196(48.4)	53(15.3)	6(1.7)	
パートナーへの気遣い	里帰り分娩	母	n＝260	17(6.5)	127(48.8)	103(39.6)	13(5.0)	*
		父	n＝273	45(16.4)	198(72.5)	29(10.6)	1(0.3)	
	非里帰り分娩	母	n＝348	18(5.1)	214(61.4)	97(27.8)	19(5.4)	
		父	n＝376	73(19.4)	249(66.2)	51(13.5)	3(0.7)	

人（%）　＊p＜.05

表６　夫の育児参加

				たくさんする	ときどきする	あまりしない	まったくしない	
沐　浴	里帰り分娩	母	n＝274	135(49.2)	96(35.0)	27(9.8)	16(5.8)	
		父	n＝274	138(50.3)	89(32.4)	35(12.7)	12(4.3)	*
	非里帰り分娩	母	n＝380	206(54.2)	116(30.5)	40(10.5)	18(4.7)	
		父	n＝376	215(57.1)	114(30.3)	28(7.4)	19(5.0)	
授　乳	里帰り分娩	母	n＝269	16(5.9)	103(38.2)	49(18.2)	101(37.5)	
		父	n＝270	13(4.8)	104(38.5)	55(20.3)	98(36.2)	
	非里帰り分娩	母	n＝375	35(9.3)	124(33.0)	83(22.1)	133(35.4)	
		父	n＝374	25(6.6)	149(39.8)	75(20.0)	125(33.4)	
おむつ交換	里帰り分娩	母	n＝274	57(20.8)	141(51.4)	60(21.8)	16(5.8)	
		父	n＝273	40(14.6)	170(62.2)	44(16.1)	19(6.9)	
	非里帰り分娩	母	n＝380	97(25.5)	180(47.3)	65(17.1)	38(1.0)	
		父	n＝377	72(19.0)	210(55.7)	64(16.9)	31(8.2)	
あやす	里帰り分娩	母	n＝273	158(57.8)	106(38.8)	6(2.1)	3(1.0)	
		父	n＝274	122(44.5)	148(54.0)	4(1.4)	0	
	非里帰り分娩	母	n＝380	233(61.3)	131(34.4)	13(3.4)	3(0.7)	
		父	n＝375	194(51.3)	169(45.0)	10(2.6)	2(0.5)	
こもり	里帰り分娩	母	n＝273	98(35.9)	140(51.3)	29(10.6)	6(2.2)	
		父	n＝274	76(27.7)	151(55.1)	44(16.0)	3(1.0)	
	非里帰り分娩	母	n＝380	143(37.6)	181(47.6)	47(12.4)	9(2.4)	
		父	n＝377	119(31.5)	204(54.1)	48(12.7)	6(1.5)	

人（%）　＊p＜.05

表７　お産の時の協力度

			満　足	まあ満足	やや不満	不　満	
お産時の協力	里帰り分娩	n＝275	131(47.6)	98(35.6)	32(11.6)	14(5.0)	***
	非里帰り分娩	n＝242	242(63.8)	102(26.9)	26(6.8)	9(2.3)	

人（%）　＊＊＊p＜.000

表８　夫からみた妻の生活の変化

			そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	
自由時間が減った	里帰り分娩	n＝274	218(79.5)	50(18.2)	3(1.0)	3(1.0)	
	非里帰り分娩	n＝374	294(78.6)	64(17.1)	9(2.4)	7(1.8)	
睡眠時間が減った	里帰り分娩	n＝274	196(71.5)	56(20.4)	12(4.3)	10(3.6)	
	非里帰り分娩	n＝374	279(74.5)	67(17.9)	19(5.0)	9(2.4)	
家事分担が増えた	里帰り分娩	n＝274	118(43.0)	89(32.4)	50(18.2)	17(6.2)	*
	非里帰り分娩	n＝373	200(53.6)	100(26.8)	49(13.1)	24(6.4)	

人（%）　p＜.05

親は父親夫の協力に「満足」「まあ満足度」と９割以上が答えているのに対して，里帰り分娩をした母親の回答は８割弱と低くなっており，有意差が認められた（p＝0.000）。

９．夫から見た妻の生活の変化について（表８）

夫に対して「妻の生活（自由時間が減った，睡眠時間が減った，家事分担が増えた）はどのように変わりましたか」という質問に「そう思う」から「そう思わない」の４段階で回答してもらった。里帰り分娩の有無に関わらず，夫の８割以上が「妻の睡眠時間が減った」「妻の自由時間が減った」と回答していた。また「妻の家事分担が増えた」という項目では，非里帰り分娩を選んだ父親の53%が「そう思う」と回答しているのに対し，里帰り分娩を選んだ父親は43%であり，有意な差が認められた（p＝0.014）。

考　　察

初めての分娩，育児に対する不安は大きく，この軽減に向けて，妊娠期から母親も父親も分娩や育児に対する知識を得たり，相談相手の確保につとめている。その中の方法の１つとして里帰り分娩があるだろう。

今回は，出産後，４ヶ月時における里帰り分娩の影響を明らかにしたい。

著者らの研究から，妊娠期において母親，父親の不安はつきず，この原因の１つとして情報の氾濫を指摘している[6]。出産後も子育てに対する情報はたくさんあり，何を選択して良いのかわからずに，かえって母親，父親の不安が増すことは予測される。また，初めての子育てでは，自分が行っている育児が正しいのか不安である，子どもの泣いている理由がわからず途方に暮れる，ちょっとした子どもの変化が正常なのか，異常なのかわからない，自分の思ったような育児ができずにイライラする，ということは誰でも感じることである。

先行研究で，数井ら[10]は，母親の育児不安は，適度な社会的相互交渉があり，ソーシャルサポートがあれば不安や抑うつは少ないと報告している。

また，武田ら[11]は，家族のサポート，とりわけ夫からの情緒的なサポートならびに親からの情緒的・手段的なサポートが大きいほど，妻の抑うつは低いと報告している。

今回は，第１点として，里帰り分娩は母親の不安やストレスを少なくするために有効であったか考察したい。

１．里帰り分娩が母親・父親の子育て不安やストレス，夫婦関係に与える影響

非里帰り分娩を選んだ母親は，里帰り分娩を選んだ母親よりもサポートが少なく，より子育てに対するストレスや不安が高いのではないかと想像したが，実際は有意な差はなかった。

この原因として，父親からの手段的サポート（育児参加）をみると，里帰り分娩の有無に関わらず，「沐浴」「子どもをあやすこと」「こもり」は参加が高い。「子どもをあやす，こもりをする」という育児参加は，難しい技術を要することでなく，子どものそばに父親がいることで自然と行っていることであろう。「沐浴」に関しては，父親は妊娠期に行われる両親学級などで練習をしており，成長して体重が増してきた子どもを沐浴するという重労働を，父親がかわって行うことで母親の育児負担の軽減につながると考えられる。

妊娠期に行った第１次質問紙調査の中で，父親に対して「あなたは沐浴，授乳，おむつ交換，子どもをあやす，こもりをするといった育児に対して，どのくらい参加（予想）しますか」という質問項目に，多くの父親が「沐浴はたくさん参加したい」と回答している。また，母親に対して同様の質問内容を「夫にどのくらい望みますか」という質問に対して，「沐浴にたくさん参加して欲しい」と答えている[6]。この様なお互いの希望もあり，父親が実際の沐浴にたくさんたずさわっているのかもしれない。

里帰り分娩の有無で差を見ると，非里帰り分娩を選んだ父親の方が「沐浴をたくさんする」と回答しており，有意に差が見られた。これは，出産後から，母親のサポートとしても，自分の育児参加としても，子どもを沐浴しており，それが継続されていることが考えられる。

今回は里帰り分娩を選んだ理由を調査していないが，父親が忙しく，出産や育児に対して十分なサポートができないため，里帰り分娩を選んでいることも考えられる。この様なケースでは，里帰り分娩から母子がもどり，父親自身が育児に積極的に参加をしたい，妻のサポートをしたいと思ってはいても，時間がなく，充分に実施できないことも考えられる。

父親の育児参加の中で「授乳，おむつ交換」は里帰り分娩の有無に関係なく，参加がやや低くなっていた。これは，生後４ヶ月では母乳栄養のみで育てているケースも多く，父親の出番は少ないのかもしれない。

父親からの情緒的なサポートであるが，母親のみに回答してもらった出産時の父親（夫）の協力に対する満足度をみると，非里帰り分娩の母親の方が父親（夫）の協力があったと回答しており，有意に差が見られた。これは，里帰り分娩をしている場合，夫の協力よりも実家の協力が主となる事が多く，当然の結果であると考える。しかし，出産という大イベントを共に乗り越えてくれたという信頼感や感謝の気持ちは，夫婦関係の確立に大きな影響を与える可能性もあり，今後検討していきたい。

お互いのパートナーからの気遣いに対する満足度をみると，今回の調査では父親，母親ともパートナーからの気遣いを高く評価しており，里帰り分娩によって有意な差はみられなかった。これは，分娩後，お互いが慣れない育児を行いながら，互いをサポートしあっているためと考える。

今回の対象者達が，妊娠や子どもを持つことを肯定的に捉えており[6]，子どもの受け入れ，お互いのサポート体制もよいものと考える。

逆に，パートナーへの気遣い度であるが，まず里帰り分娩の有無に関わらず，母親が父親に対する気遣いよりも，父親が母親に対する気遣いの方が高い。これは子育てによって大きく生活が変化した母親のストレスや，育児の大変さを父親が理解しており，母親に対して十分な気遣いを行っているためと考える。この裏付けとして，今回の調査の中で，父親に対して母親の生活がどのように変化したかを質問している。この中で父親は，母親の生活の中で，自由時間，睡眠時間が減り，家事分担が増えたと回答している。この様に父親は，母親が出産によって生活が変化し，ストレスが高いだろう事を理解しており，気遣っているのではないだろうか。

里帰り分娩の有無で見ると，非里帰り分娩を選んだ父親（夫）のほうが，母親（妻）の家事分担が増したと有意に高く回答している。これは，出産後から共に育児を一緒に行ったことにより，父親は母親の生活の大変さを理解しているためと考えた。

パートナーへの気遣い度においては，非里帰り分娩の母親の方が，有意に父親（夫）に対する気遣い度が高い。お産の時の協力や一緒に育児を行っているという夫のサポートの評価，自分の生活の変化などを理解してくれているという実感が，相手に対する気遣いという形で表現していると考えられる。

里帰り分娩を選んだ母親の場合は，里帰りをしていた間，実家の親の育児支援があり，自分の親であるために依頼しやすい，何でも言えるという気楽さがある。しかし，親子３人の生活が始めると，今までは親が行ってくれた育児の多くを一人で担わなわなければならず，また，育児に不慣れな父親との生活は，夫を気遣う以前に育児で精一杯なのかもしれない。

妊娠・分娩は，父親，母親という新しい役割を持ち，今までの生活が大きく変化し，父親にも母親にもストレスを与えるものである。この様な時期にお互いをどのくらい気遣っているのか，あるいはその気遣いを受けとめているかということが，その後の夫婦関係を円滑にしていく１つの要因であると考える。

里帰り分娩が父親の子育て不安やストレスに与える影響であるが，里帰り分娩の有無で差は見られなかった。この原因として，父親の生活の変化が母親ほど大きくないこと，育児に対する関わり方も生後４ヶ月では母親よりも少なく，この時期は父親が積極的に育児に参加するというよりも，母親のサポート役として育児に参加している可能性もあると考えた。

第２点として，里帰り分娩と母親・父親の子どもイメージや親役割について考察したい。

２．里帰り分娩が母親・父親の子育てに与える影響

今回の調査結果からは，父親も母親も「子どものイメージ」において，里帰り分娩の有無で差は見られなかった。

「親としての実感」をみると，母親は里帰り分娩の有無で有意に差はみられなかったが，父親は，非里帰り分娩のほうが「親の実感」が高く，有意に差が認め

られた。これは先行研究で指摘されている事と同様である[1,2)]。

子どものイメージに差が見られなかった原因として，今回の調査時期が生後４か月頃であり，この時期の成長発達として定頸がある，手や指を口に持っていく，指しゃぶりをする，寝返りが始まる，物をつかむことができる，あやすと笑う，声を出して笑う，「アーウー」などの喃語が始まる，世話をしてくれる人の声や顔がわかってくる時期である。抱っこもしやすくなり，子どもからのフィードバックがもどってくるようになると，父親も育児に参加しやすくなる。さらに，この頃になると，親が子どもの生活ペースも把握でき，育児に対する楽しさも増してくる時期なのであろう。

また，堀内ら[12)]は，育児不安は分娩１ヶ月後が最も高くなると報告しており，今回の調査の時期は生後４ヶ月以降の子どもであり，母親，父親の育児に対する不安も軽減し，子どもへの愛着が深まっている時期と考えた。

父親の「親としての実感」の獲得であるが，これは育児参加をすることによって，子どもに対する理解が深まり，子どもへの愛着形成や親役割が養われてくると考える。

交通機関の発達や社会の理解によって，父親が早期に子どもとふれあう機会は以前よりも多くなっていると思われるが，今後，さらに，父親の育児介入やふれあいの時間を作り，子どもの理解を深め，子どもからのフィードバックを感じていけるように援助していくことが「親役割の獲得」につながると考える。

ま と め

今回の調査では，里帰り分娩が子どものイメージや夫婦関係，父親の育児参加に与える影響を調査した。この中で

１．非里帰り分娩を選んだ父親の方が，里帰り分娩を選んだ父親に比べて，母親（妻）のお産時の協力，母親（妻）の生活の変化の理解（妻の家事労働の増加），育児参加（沐浴），父親としての実感が高かった。

２．非里帰り分娩を選んだ母親の方が，夫に対する気遣いが高かった。

これらのことから，里帰り分娩は，夫婦関係を円滑にするために必要なパートナーの理解や気遣いにおいて，若干の問題があること，父親の育児参加や親としての実感の獲得がスムーズに行われない可能性があることがわかり，これは先行研究と同様の結果であった。里帰り分娩を経験した夫婦・親子には今後，夫婦間での理解を深めるような働きかけや，父親の育児参加を促すことで，よりスムーズな父子関係の確立が望めると考える。このために，妊娠期における両親学級などを利用して，里帰り分娩のメリット，デメリットを夫婦が把握し分娩方法を選べるように情報を伝えていくこと，父子関係をスムーズに形成できるように，沐浴だけではなく，実際の子どもとふれあう機会を作ることも有効であると考える。

今後の課題

今回は，里帰り分娩を有無での差をみたのみであり，今後，更に詳しくサポート体制や夫婦でのコミュニケーションなどの満足度との関連，どのような因子が関連しているかを調査し検討していく必要がある。

注

本論文は，第50回日本小児保健学会（2003）で発表した内容を含む。

本論文は，文部科学省研究費補助金基盤研究（B）(2)（課題番号13480021　研究代表　田村　毅）をうけておこなったものである。

謝辞

調査に協力してくださった方々に深く感謝いたします。

参 考 文 献

１）瓢風須美子（1987）　里帰り分娩が家族の発達段階に達成に及ぼす影響―都市における調査成績をとおして―．母性衛生．28．1

２）野村雪光，川村　豊，品川信良，竹下敏光（1983）里帰り分娩における親子関係．周産期医学 vol. 13 no. 12：380－383

３）加藤忠明，斉藤幸子，加藤則子，高野　陽（1986）里帰り分娩の実態調査．小児保健研究．第45巻．第１号：32－36

４）玉田太朗，阿部直英，本山光博，佐藤　正，青木利恵（1985）　里帰り分娩の母子保健学的研究．厚生省心身障害研究　母子保健システムの充実・改善に関する研究　総括報告書．453－463

４）村山郁子（1990）　里帰り分娩の保健指導．Perinatal

Care. 9：27－36

5）田村　毅，倉持清美，中澤智恵，及川裕子，岸田泰子（2000）　出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響についての予備的調査．東京学芸大学紀要第６部門．52：27－43

6）倉持清美，中澤智恵，田村　毅，及川裕子，木村恭子，岸田泰子（2001）　妊娠期の夫婦の特徴―第１次質問紙調査とインタビュー調査から―．東京学芸大学紀要第６部門．53：73－81

7）田村　毅，倉持清美，中澤智恵，岸田泰子，木村恭子，及川裕子，荒牧美佐子，持田恭子，森田千恵（2002）出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響⑴　出産前後の面接調査のまとめ．東京学芸大学紀要第６部門．54：41－56

8）倉持清美，中澤智恵，田村　毅，及川裕子，木村恭子，岸田泰子，森田千恵，持田恭子，荒牧美佐子（2002）出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響⑵　質問紙自由記述から．東京学芸大学紀要第６部門．54：57－67

9）及川裕子，田村　毅，倉持清美，中澤智恵，岸田泰子，木村恭子，荒牧美佐子，持田恭子，森田千恵（2002）出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響⑶　子育て教室の実践報告．東京学芸大学紀要第６部門．54：69－74

10）数井みゆき，武藤　隆，園田菜摘（1996）　子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ母親について．発達心理学研究７：31－40

11）武田　文，宮地文子，山口鶴子他（1998）　産後の抑うつとソーシャルサポート．日本公衆衛生誌45：564－571

12）堀内　勁（1997）　育児不安対策．Neonatal Care 秋季増刊号：126－129